

イチゴ育苗ポットへのLPコート全量基肥施肥 第1報 育苗ポットへの全量基肥施肥

高森敬一・石田豊明・西本 太 (熊本県農業研究センター)

Keiichi TAKAMORI, Toyooki ISHIDA and Futoshi NISHIMOTO : Single basal application of POCFs (MEISTER) to strawberry pots

1. Single basal application to strawberry pots

イチゴ栽培は、長期で作業の省力化や軽作業化が今日の課題となっている。ここでは、LPコートを利用した肥効調節型肥料がイチゴの生育および収量に及ぼす影響について検討した。

1. 材料および方法

試験は、1995年に熊本県農業研究センター農産園芸研究所野菜部八代研究室の露地およびビニルハウスで実施した。試験区は、培土に慣行培土(八代研究室標準)とイチゴ専用培土を用い、それぞれ培土量を50, 100, 200, 400, 800 mlとした。また、育苗時の株当たりチッソ施肥量35, 140 mgと肥効期間200日のLPSFと肥効期間240日のLPSG(本ば用チッソ肥2.1g/株含む)を組み合わせ試験した。

育苗は、金網を利用した高設育苗施設で行い、供試品種に‘とよのか’を用いた。

採苗期は、1995年6月5日、定植期は、9月18日。栽植密度は、畦幅120cm, 株間22.5cm, 条間30cmの2条植え(740株/a)とした。

本ば施肥量(チッソ, カリは育苗時同時施用済み)は、 $N : P_2O_5 : K_2O = 1.6 : 1.9 : 1.2$ (kg/a)。

2. 結果および考察

苗の生育は、培土量が多くなるほど良好で、クラウン径の大きさは $800ml > 400ml > 200ml > 100ml > 50ml$ の順であった。また、培土量200mlのクラウン径は、育苗期施肥量140mgが35mgよりやや大きいか同程度であった。

項花房の開花期は、慣行区と八研培土800ml・140mg・SF区が11月7日で、その他は11月10日程度であった。

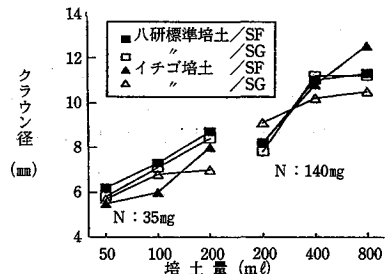
培土の種類による収量は、八研培土が200ml, 400ml, 800mlのいずれにおいても高かった。また、培土量別収量は、 $800ml > 400ml > 200ml$ の順であった。

本ば肥料SF, SGの収量は、慣行栽培より多く、溶出が早いSFが定植後の新葉の展開が早く生育も促進され、SGより多かった。

LPコートを利用した肥効調節型肥料(育苗期+本ば肥料含む)は、育苗時の基肥施肥で、慣行栽培と同程度もしくはそれ以上の収量を上げることができた。

以上の結果から、培土は、八研標準培土が適し、量が多いほど苗の生育も安定し大苗が確保でき収量も増加傾向を示すが、培土量の削減・ポット重量の軽量化を考えると市販の黒ポリポットを利用した場合200mlが限界と考えられる。

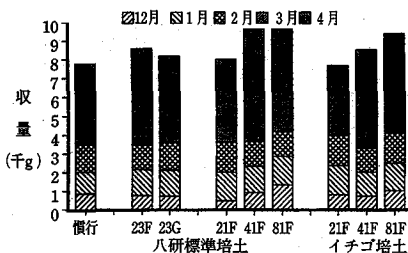
イチゴは、育苗期から本ば栽培期間に要する肥料をLPコートを利用した肥効調節型肥料を用いることにより育苗ポットへの全量基肥施肥でも栽培が可能と考えられる。この場合、本ば用肥料としては溶出がやや早いSFタイプが適していると考えられる。



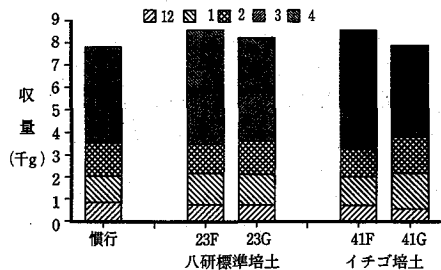
第1図 培土量、施肥量とクラウン径

第1表 項花房および第一次腋花房の開花期 (14株/区調査)

試験区 (培土量-育苗期チッソ量-種類)	項花房 (月/日)	第一次 腋花房 (月/日)	内葉数 (枚)
慣行	500-300 11/7	12/23	5.3
八研培土	200-35-SF	11/10	5.9
	200-35-SG	11/12	5.7
	200-140-SF	11/14	4.9
	400-140-SF	11/10	5.6
イチゴ培土	800-140-SF	11/7	6.0
	200-140-SF	11/9	6.1
	400-140-SF	11/10	5.8
	800-140-SF	11/10	5.1



第2図 月別収量 (14株/区調査)



第3図 本ば肥料の種類別収量 (14株/区調査)